

平成 28 年 10 月 12 日

平成 28 年度 全国学力・学習状況調査の結果について

新発田市教育委員会

1 平均正答率

	小 学 校				中 学 校			
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
新 発 田 市	76.2	62.5	81.8	49.1	76.2	66.8	61.2	42.8
新 潟 県	75.8	59.6	79.6	47.7	76.5	66.9	62.3	44.0
全 国	72.9	57.8	77.6	47.2	75.6	66.5	62.2	44.1
県平均との差	+0.4	+2.9	+2.2	+1.4	-0.3	-0.1	-1.1	-1.2
全国平均との差	+3.3	+4.7	+4.2	+1.9	+0.6	+0.3	-1.0	-1.3

(1) 小学校の特徴

- ① 全ての種目において、新発田市の平均正答率は全国平均・県平均を上回っている。
- ② 全体的に、県の平均正答率は全国平均よりも高い傾向にある。
- ③ 全国平均・県平均との差は、算数では昨年度より大きくなっており、国語ではわずかに小さくなっている。

(2) 中学校の特徴

- ① 国語において、新発田市の平均正答率は全国及び県平均と同等である。
- ② 数学において、新発田市の平均正答率は全国及び県平均をわずかに下回っている。
- ③ 全体的に、県の平均正答率は全国平均とほぼ同等である。
- ④ 昨年度と比較すると、全体的に県平均・全国平均との差が小さくなっており、好ましい傾向が見られる。

2 考 察

(1) 学校別平均正答率

- ① 小学校では 4 種目の平均正答率の合計で、7 割以上の学校が全国平均以上または同等であった。全国平均を上回る学校数が昨年度より増えており、10 ポイント以上上回った学校も半数以上あった。
- ② 中学校では 4 種目の平均正答率の合計で、半数以上の学校が全国平均以上または同等であった。小学校同様、全国平均を上回る学校数が昨年度より増えている。
- ③ 学校規模の違いがあるため、単純に比較はできないが、学校間の差は、小学校では昨年度より大きくなり、中学校では小さくなった。特に中学校では、昨年度全国比で -20 ポイントまであった差が、今年度は -10 ポイント未満となっており、学力の底上げが図られている。

(2) 各設問に見られる傾向

	小 学 校				中 学 校			
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
総 設 問 数	15	10	16	13	33	9	36	15
全国平均と同等又は上回った設問数	15	9	16	13	29	7	26	9

① 小学校の傾向

ア 全国平均を下回った設問が国語 B で 1 問あったが、それ以外の設問は全て全国平均と同等、またはそれを上回った。

イ 全国平均を下回った設問は、国語Bの「活動報告文において課題を取り上げた効果を捉える問題」で、 -3.6 ポイントであった。

② 中学校の傾向

ア 全国平均を下回った設問が、国語Aで4問、国語Bで2問、数学Aで10問、数学Bで6問あったが、全国平均と同等、またはそれを上回った設問数は、国語・数学共に増えており、好ましい傾向にある。特に、数学Aの増え方が顕著であり（8問増）、基礎・基本の定着が図られてきていると言える。

イ 全国平均を5ポイント以上下回った設問は、国語A・数学Bにはなかったが、国語Bに1問、数学Aに4問あった。この数も昨年度より少なくなっている。

ウ 国語Bで特に全国平均との差が大きかったのは、「課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考える問題」で、 -6.4 ポイントであった。

エ 数学Aで特に全国平均との差が大きかったのは、「分数と小数の乗法の計算問題」の -7.8 ポイント、「円柱の体積から円錐の体積を求める問題」の -10.4 ポイント、「反比例を表した事象を選ぶ問題」の -5.7 ポイント、「反比例のグラフから式を求める問題」の -8.1 ポイントであった。

(3) 家庭学習との関連

① 小学校・中学校ともに、1日当たりの家庭学習の時間が長い児童生徒ほど平均正答率が高くなる傾向が見られた。

② 平日の家庭学習の時間が1時間未満の児童生徒の割合は、小学校で26%（昨年度比 -4% ）、中学校では40%（昨年度比 -4% ）であった。その内、30分未満と全くしないを合計した児童生徒の割合は、小学校では2.7%、中学校では13.7%で、いずれも昨年度より減少している。

③ 小学校・中学校共に、家庭学習の習慣化が図られてきている。今後も時間を確保するとともに、授業内容との関連を図るなど、児童生徒が意欲をもって主体的に取り組めるよう指導を継続していく必要がある。

(4) テレビ・テレビゲーム等との関連

① 小学校・中学校ともに、テレビやビデオ・DVDの視聴時間、テレビゲームをする時間、携帯電話・スマートフォンの利用時間が長い児童生徒ほど平均正答率が低くなる傾向が見られた。

② テレビ等の視聴時間より、テレビゲームをする時間、携帯電話・スマートフォンの利用時間に顕著な相関関係が見られた。

③ 学校と家庭が連携し、メディアコントロールの取組を引き続き行っていく必要がある。

3 成果と課題

(1) 小学校について

① 全般的に良好な結果である。特に、算数について伸びが見られる。新発田市学習指導改善委員会の提言等を受け、各学校で授業改善に取り組んできた成果であると考えられる。

② 差は小さいものの、算数Bで全国平均を下回る設問が複数あり、活用力に一部課題が見られる。日常生活の事象を算数の学習内容を用いて考察する学習を取り入れるなど、活用力を育てる授業の充実が一層必要である。

(2) 中学校について

① 授業の目標の明示と最後の振り返りを位置付けるなどして、生徒一人一人に確かな学びが実感できる授業づくりに取り組んできた。国語が全国平均を上回り、数学がほぼ同等近づくまで向上したのは大きな成果である。

② 昨年度より少なくなったものの、数学A・Bともに全国平均を下回る設問が数問あり、数学に課題がある。「教え、考えさせる授業」等により基礎・基本の確実な定着を図るとともに、「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」が実感できる授業づくりを一層進める必要がある。